

Flat Stanley Project を活用した COIL 型 異文化協働学習と国際交流の可能性

東本 裕子
長島 倫子
検校 裕朗

- §1. はじめに
- §2. COIL 異文化協働学習
- §3. バーチャル・ホームステイ交流学習プログラムの概要
- §4. 考察
- §5. おわりに まとめと今後の課題

梗概

本稿では、コロナ禍における異文化協働学習と国際交流の可能性について、実践例を紹介すると共に今後の課題について論じた。2020 年度より海外研修や国際交流行事の中止が続く中で学生の語学学習や異文化理解への意欲を継続するために、COIL (Collaborative Online International Learning) 協働学習型の異文化交流を実施した。オンライン上での初回の交流における導入を容易にし、学生の実生活に基づく、よりパーソナルな内容の交流に近付ける方法として、カナダ等の複数言語社会で第二言語習得の教材としても取り入れられている Flat Stanley Project を活用したバーチャル・ホームステイプログラムを考案し、学生が海外の交流相手の人形を相互に受け入れる形式での異文化交流を実施した。

プログラム実施に際しては、Web 会議システム Zoom による複数回の同期型交流と、Flat Stanley Project の従来のジャーナル (異文化体験日誌) 作成スタイルによる非同期型交流を併用した。実践中の学生の様子から、L2 Self (外国語を使用した自己) による積極的なコミュニケーションと豊かな自己表現が見られ、それと併せて、対面ではなくオンライン交流による学生の心理的不安の軽減も観察された。今後さらにソーシャルネットワークワーキングアプローチ (SNA) の側面からの言語教育と異文化理解教育の可能性も探り、ウィズ / ポストコロナ時代の異文化・国際交流に繋げたい。

キーワード：異文化理解、国際交流、COIL、Flat Stanley Project、L2 Self、ソーシャルネットワークワーキングアプローチ (SNA)

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の収束の見通しがつかない中、著者東本は横浜商科大学にて担当している異文化理解・英語コミュニケーションを学ぶゼミの学生と英語開講の選択科目で日本文化を学ぶ学生、また関東地方の TE 大学にて担当している留学準備講座の学生へ異文化交流の機会を提供したいと考え、国際交流基金ソウル日本文化センター¹と SNA 交流学習実践研究会（SNA-COIL）²を通して海外の大学へ同期型、非同期型双方の交流の打診を行った。

英語のみを使用言語とする国際交流は、オンライン且つ特に初対面での交流の場合に意思の疎通が困難になる場合もあるため、今回は交流相手として海外で日本語を学習し、英語力も比較的高い大学生を対象に絞った。双方の学生の学習対象言語である英語と日本語の両言語を交流に使用することにより、参加者同士のコミュニケーションの理解を深め、更なる語学学習への意欲喚起や異文化理解への動機づけを行うと共に、コロナ禍で様々な困難やストレスを抱える学生生活の中で、語学力に左右され過ぎずに純粋に異文化交流を楽しむ機会を提供することを目標とした。

今回、韓国、中国、アメリカの複数の大学より快諾を得て同期型と非同期型の交流を複数回実施した中で、本稿では、韓国の KG 大学と KD 大学において日本語を専攻している学生と、日本の TE 大学においてコミュニケーションを専攻する留学準備講座の学生との間で実施したバーチャル・ホームステイプログラムについて実践報告を行う。また、プログラム実施中の参加学生の様子の観察及び事後アンケートによって見えてきた成果及び課題についての考察を加える。

2. COIL 異文化協働学習

COIL は 2006 年にアメリカのニューヨーク州立大学（State University of New York）で開発された国際交流授業モデルであり、経済的、時間的制約により実際の海外渡航が困難な学生など幅広い学習者を対象とする異文化理解学習に活用されてきた。日本では、2018 年に関西大学を中心として JPN-COIL 協議会が発足し、現在横浜商科大学を含む国

¹ 国際交流基金は 1972 年に日本の国際文化交流事業を推進するための専門機関として設立された外務省所管の特殊法人を前身とし、2003 年に独立行政法人国際交流基金として設立された。ソウル日本文化センターは、2002 年に設立された国際交流基金の海外事務所である。（<https://www.jpfo.or.kr/>）

² SNA 交流学習実践研究会（SNA-COIL）は、新時代の言語教育アプローチである「ソーシャルネットワークングアプローチ（SNA）」を理論的背景とし、SNA の理論研究とそれに基づいた実践研究を志向し、特に SNA 実践の類型の 1 つである交流学習に基づいた外国語教育の実践と研究を行っている。2021 年に韓国で創立された。（<https://sites.google.com/view/snakorea/>）

内外の約 50 校が参加をしている。COIL の日本語名称「オンライン海外大学連携協働学習」が示す通り、Web 会議システム等を利用し、海外の学生と共通の学習目標のもと実践的な協働学習を進める教育実践モデルである。留学や海外研修の中断が長期化する中で、語学をはじめ国際教育関係者の対コロナ禍アクションとして、これまでモビリティに特化しすぎていた視点を転換し、「国内における国際化 (Internationalization at Home/IaH)」へ目が向けられるようになり (池田, 2020)、COIL にもさらに注目が集まった。

COIL の先行研究としては、アウトバウンド促進授業実践としてのオンライン国際連携事例を紹介した池田 (2015) をはじめ、日本とアメリカの大学間の COIL 型授業の実践と課題を考察したもの (全・Miyamoto, 2019, 山下, 2021, ウィルソン・岩野, 2021, 岡崎・石川・名護, 2021) の他にも、日本とインドネシア間で SDGs を共通テーマに共同演習を実践した和歌山大学の事例 (藤山, 2021) や、日本とロシア間でコミュニケーション能力の向上やピアインストラクションをキーワードに実践した京都外国語大学の日露共同授業の事例 (菱川 2021)、対面授業とオンライン授業を掛け合わせた小樽商科大学の Blended Learning の事例 (中津川・平田, 2017) 等、コロナ禍の長期化と相まって対象地域や協働学習の内容も多岐に渡る実践や研究が進められている。

今回の COIL 活動の特徴としては、Flat Stanley Project というカナダの小学校教員 Dale Hubert 氏が発案した異文化交流プログラムを導入した点が挙げられる。Flat Stanley Project は、元々はアメリカ人の Jeff Brown の書いた絵本 “Flat Stanley” を基に先述の Hubert 氏が開発した異文化交流プログラムであり、紙で作成した Stanley 人形を遠方の友人に送り、現地の生活を経験した写真と説明を記したジャーナルを送り返してもらうという、疑似海外体験活動として異文化理解教育に活用されている。今回は、コロナ禍の郵便事情を鑑み、参加学生は初回の Zoom での同期型交流後に相手の学生をイメージした Stanley 人形を作成し、バーチャル空間を渡航して来たという仮設定で交流を行った。

日本に居ながら異文化交流が可能となる COIL の一つのメリットとして、オンライン上の言語学習による心理的不安の軽減が期待された。筆者東本が 2020 年度に横浜商科大学にて担当した英語の授業は全て Web 会議システム Zoom を使用したオンライン同期型講義形式に切り替わったが、例年の対面形式の授業と比較し、積極的に発言する学生が増加しただけでなく、大きい声で英語を発声しようとする姿勢やよりネイティブに近い発音で発声しようとする姿勢がどのクラスでも顕著にみられた。通常の教室では控え目で自ら発言をしないタイプの学生や英語に苦手意識を持つ学生が意欲的に発言や質問をし、アウトプットを楽しむ姿も見られた。実際に学生からの授業への感想として、ピアプレッシャーを感じる対面教室の中での発言のし辛さが Zoom 授業により解消された点、発音、発声に対する苦手意識や恥ずかしさの軽減など、オンライン授業による心理的負担の減少に関する声も多く聞かれた。

今回はオンライン協働学習への Flat Stanley 導入等の工夫により、外国語を用いる交流

への心理的抵抗の軽減と、交流後の学生の自信や自己効力感の向上につながる COIL 交流を目指した。また、言語教育の目的が単なる語学力向上ではなく、異文化への興味喚起と柔軟な姿勢を育成するべきものであること、そのために積極的な交流を自ら行い、異文化理解に基づいたコミュニケーション能力を身につけることが重要であることを学生に伝え、本交流を通して体感してもらえよう心掛けた。本交流プログラムは、既成の COIL の実践に独自性を加え、Zoom による複数回の同期型交流と、Flat Stanley Project の従来のジャーナル（異文化体験日誌）作成スタイルによる非同期型交流を併用したという点で斬新でありながら教育的示唆を含んだ実践であると言えるであろう。

3. バーチャル・ホームステイ交流学習プログラムの概要

本稿で報告する交流プログラムは「Flat Stanley 人形を利用した日韓相互ホームステイプログラム」と題し、2021年7月16日から7月23日までの8日間行った。参加者は20名で、その内訳は日本側が TE 大学で留学のための英語の授業を受講している10名、韓国側は KG 大学の日本語教育科の学生7名および KD 大学の日本語の授業を受講している学生3名である。参加者の外国語能力³は、日本側の場合、英語が中級である参加者が5名、上級が5名であった。英語中級者のうち1名は韓国語も学んでおり、そのレベルは初級であった。また、韓国側については、日本語が初級である参加者が2名、中級が3名、上級が5名であった。英語は9名が中級であり、日本語初級である参加者1名のみが英語上級であった。この参加者の外国語能力をもとに、以下表1のように交流相手の組み合わせを決定した。

表1 参加者および組み合わせの詳細

No.	日本側		韓国側	
	参加者	外国語能力	参加者	外国語能力
1	J01	英語中級、韓国語初級	K01	日本語初級、英語中級
2	J02	英語中級	K02	日本語上級、英語中級
3	J03	英語中級	K03	日本語上級、英語中級
4	J04	英語上級	K04	日本語上級、英語中級
5	J05	英語上級	K05	日本語中級、英語中級
6	J06	英語中級	K06	日本語上級、英語中級
7	J07	英語上級	K07	日本語中級、英語中級
8	J08	英語上級	K08	日本語中級、英語中級

³ 参加者の外国語レベルは、各校の教師が普段の授業内でのパフォーマンスを基に初級・中級・上級の3段階で判断した。但し、韓国側の参加者の英語能力は参加申請時に自己申告してもらった。

9	J09	英語中級	K09	日本語上級、英語中級
10	J10	英語上級	K10	日本語初級、英語上級

本交流プログラムでは、當作（2013）で提唱されたソーシャルネットワーキングアプローチ（SNA）の理念に基づき目標を設定した。SNAは、言語知識を獲得する「わかる」学習とその知識を使って活動することができる「できる」学習という従来の学習に加え、言語を用いて円滑な社会活動を行うための「人、モノ、社会とつながる」学習を言語教育の目標としている。また、「自分の持っている知識、能力、資質を最大限利用し、自分の住んでいるグローバル社会、地域コミュニティの問題を解決し、その発展に貢献できる地球市民（global citizen）を作ること」（Byram,2013）を言語教育の理念としており（當作,2021）、この理念を達成するために、他人を知り、自分を知り、そして他人と自分をつなげる能力を發展させ、総合的コミュニケーション能力獲得を目指している。本交流プログラムでは、まずホームステイのホスト・ゲストという役割別に次の4つの目標を設定した。まず、ホストとしての目標は、(1) 自身の生活習慣および自身の生活圏にある観光地・公共施設・商業施設などについて学習することで言語の関連知識を得ることができる。(2) ゲストの興味・関心を考慮して、自国の魅力が紹介できるという2つである。そして、ゲストとしての目標は、(3) ホストに自身の相手国に対する興味・関心を伝えることができる。(4) ホストの文化が理解できるという2つである。そして、この4つの目標を総合的コミュニケーション能力を構成する3領域×3能力+3連繋の「スリーバイスリープラススリー」に分析及び展開し、更に具体的な学習目標を設定した。以下の図1はSNAにおける3領域×3能力+3連繋の概念図である。

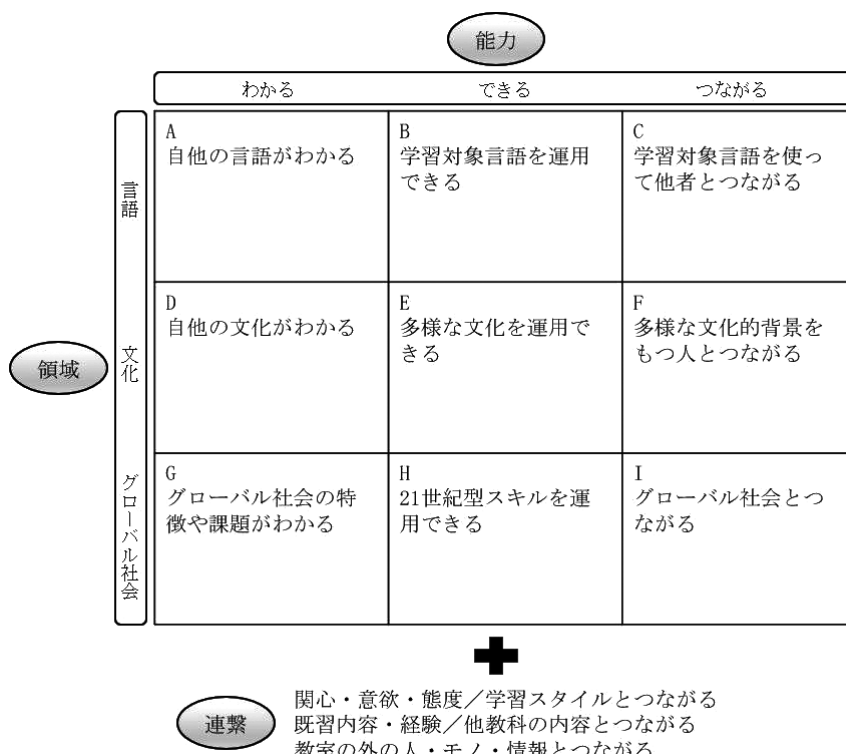


図1 3領域×3能力+3連繫の概念図（當作・中野, 2016）

そして、図2は本交流プログラムの3領域×3能力+3連繫である。プログラム開始時に参加者に図2を提示して目標を意識化させた。

	わかる	できる	つながる
言語領域	<ul style="list-style-type: none"> 自身の身近な地域、自国ならではの習慣や文化、自身の生活習慣を説明する表現がわかる 相手の身近な地域、相手国ならではの習慣や文化、相手の生活習慣を説明する表現がわかる 	<ul style="list-style-type: none"> 相手の興味・関心や希望を尋ねることができる 自身の興味・関心や希望を説明することができる 自身の身の回りのことについて説明することができる 	<ul style="list-style-type: none"> 学習対象言語(英語/日本語/韓国語)を用いて、母語を異にする人とつながる
文化領域	<ul style="list-style-type: none"> 異文化に属する人が興味を持つ自国文化がわかる 自身の生活圏の中にある自国ならではの習慣や文化がわかる 旅行ガイドブックなどを通してではわからない異文化がわかる 	<ul style="list-style-type: none"> 異文化に属する相手の興味や好みに合わせてホームステイプランを企画し、滞在日誌を作成することができる 自国の文化について説明することができる 自国の文化に関する質問に答えることができる 	<ul style="list-style-type: none"> オンラインセッションや滞在日誌を通して経験を共有し、異文化に属する相手とつながる 自身のホームステイでの経験を紹介することで、他のプログラム参加者とつながる
グローバル社会領域	<ul style="list-style-type: none"> 異文化に属する自身と同年代の人の生活環境と自分の生活環境の共通点と相違点がわかる 	<ul style="list-style-type: none"> 相手と協力しながらホームステイのプランが立てられる 創造力を発揮してホームステイプランおよび滞在日誌が作成できる 自身の身近にある様々な情報を目的に合わせて取捨選択し、整理した結果を相手に伝えることができる(情報リテラシー) 情報通信技術(Zoom)を活用し、異文化に属する相手とコミュニケーションできる 	<ul style="list-style-type: none"> 偏見や固定観念を抱くことなく相手国および相手国の人と付き合う 地球市民としての第一歩を踏み出す
連携	連携1：外国語の学習意欲と異文化に対する興味を喚起する 連携2：これまでに学習した語彙・文法・会話技法を総合的かつ応用的に使用する 連携3：自国あるいは自身の身近な地域の特色や良さを発見する		

図2 本交流プログラムの3領域×3能力+3連携

また、プログラムを開始するにあたり、参加者には次のように場面状況を説明した。

日本の学生と韓国の学生がペアとなり、夏休み期間にお互いの国に2泊3日間ホームステイをする。新型コロナウイルス感染症の影響で現地に行くことができないので、Stanley 人形がゲストの代わりとなり、ホストの国を訪れる。ホストは計画に基づいてStanley 人形にさまざまな体験をさせ、その様子を写真に収めて、2泊3日間の滞在日誌を作成する。ホームステイ終了後、ゲストはホストからジャーナル（異文化体験日誌）を受け取る。その後、ジャーナルを見ながらホームステイの思い出について話し合う。

そして、オンライン上でミーティングが開催できる Web 会議システム Zoom による2回の同期型交流と Flat Stanley Project の従来の活動であるジャーナル作成の非同期型交流を組み合わせることで交流を行った。以下、図3に交流の流れを示す。

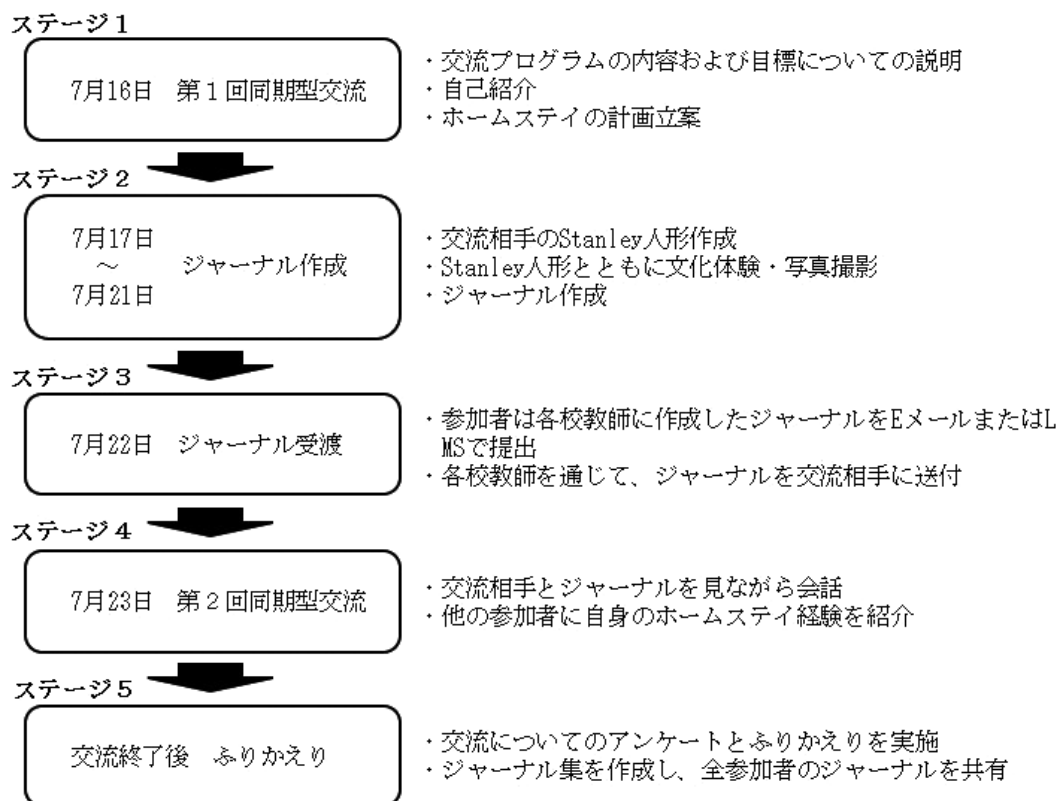


図3 交流プログラムの流れ

交流の第1日目であるステージ1では、Zoomで90分のオンラインミーティングを実施し、プログラムの説明および交流相手との顔合わせを行った。教師がプログラムの概要と目標を説明した後、各ペアはブレイクアウトルームに入り、まず約10分間自由に互いに自己紹介した。その後、韓国の参加者が日本の参加者のところにホームステイする際の計画、そして反対に日本の参加者が韓国の参加者のところにホームステイする際の計画をそれぞれ25分で話し合った。ホームステイの計画を立てる前に、教師から新型コロナウイルス感染症が拡散している現状でも実現可能なプランの例として、「家で一緒に料理を作って食べる」「家でテレビを見ながら人気のある番組や芸能人を紹介する」「学校や図書館など自分が普段よく訪れる施設を紹介する」等を紹介した。また、飲食店などを紹介したい場合、新型コロナウイルスへの感染の不安や経済的負担が生じるため、店の外観のみ写真に撮り、料理の写真は以前撮影したものや店のホームページに掲載されている写真を見せるなどして、プランの一部のみを実現する形にしてもよいと伝えた。話し合いの言語は当初特に指定しなかったが、休み時間の際に一部の参加者から「自分は英語が話したいが、相手は日本語で話したがっている」等の声が上がったため、休み時間後に教師から参加者にまずお互いどのような言語で話すのか決めてから会話するように伝えた。図4は同期型交流の様

子である。左の写真は参加者がメインセッションに集合している時の写真、右の写真はブレイクアウトルームで対話している際の写真である。参加者がブレイクアウトルームで活動している際、教師はカメラとマイクをオフにした状態で活動が円滑に行われているか各ルームを巡回した。

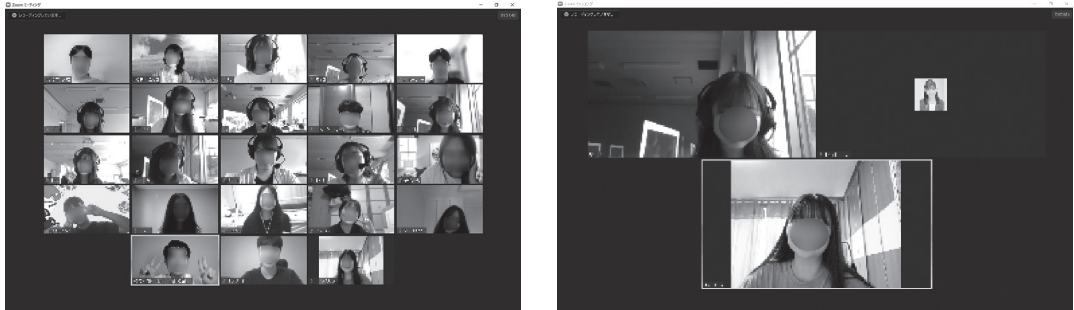


図4 第1回同期型交流の様子

ステージ1の同期型交流が終了した後、5日間の非同期型のジャーナル作成期間であるステージ2に移行する。参加者はまずホームステイに来る交流相手のStanley人形を作成する。そして、そのStanley人形とともに交流相手と立てた計画を1つずつ実行し、その様子を写真に収める。最後に2泊3日分のジャーナルを作成する。従来のFlat Stanley Projectでは、ホームステイに行く参加者が自身のStanley人形を作成して郵送で交流相手に送付し、それを受け取った交流相手は紙媒体でジャーナルを作成することになっているが、本交流プログラムでは郵送にかかる時間を省くため、そして郵送によるトラブルを防止するために、ホームステイのホストとなる参加者がゲストのStanley人形を作成し、電子ファイルでジャーナルを作成することにした。以下の図5は参加者が作成したStanley人形、図6は参加者が作成したジャーナルである。



図5 参加者が作成したStanley人形

る。参加者はジャーナルを各校の教師に E メールまたは LMS（学習管理システム：Learning Management System）で提出し、各校の教師がそのジャーナルを交流相手に渡した。これは参加者同士が E メールアドレスなどの個人情報を開示することなくジャーナルを受け渡せるようにするためである。ジャーナルの受け渡しに際して、交流相手が作成したジャーナルを読んでから翌日の第 2 回目の同期型交流に臨むよう教師から参加者に伝えた。

交流の最終日であるステージ 4 では、再び Zoom で 90 分のオンラインミーティングを実施した。まず、交流相手とブレイクアウトルームに入り、ジャーナルを見ながらホームステイの感想や質問などを自由に話させた。話が一方のジャーナルに偏らないよう、日本でのホームステイについての話を 20 分、韓国でのホームステイについての話を 20 分と時間を決めて進行した。次に、交流相手以外の参加者とペアになり、再びブレイクアウトルームに入り、自身のホームステイの経験を第三者に説明する時間を 25 分設けた。最後に参加者全員がメインセッションに集まり、各校 1 名ずつ交流の感想を述べ、記念撮影をして交流を終えた。以下の図 7 は第 2 回同期型交流の様子である。参加者がブレイクアウトルームで Zoom の画面共有機能を用いて一緒にジャーナルを見ながら、日韓それぞれのホームステイについて話し合っている。

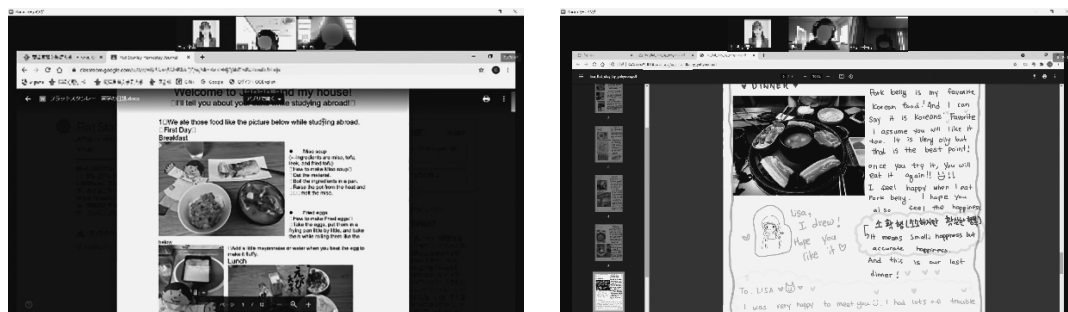


図 7 第 2 回同期型交流の様子

交流プログラム終了後のステージ 5 では、E メールまたは LMS で交流についてのアンケート用紙とふりかえりシートを配布し、参加者にそれぞれ記入して提出してもらった。また、オンラインストレージサービスの Google Drive を利用して全ての参加者のジャーナルが閲覧できる電子ジャーナル集を作成し、共有した。このジャーナル集は紙媒体で作成すると約 150 ページにもなるが、電子ジャーナル集は容量がわずか 471KB の PDF ファイルであるため保管場所を取らず、作成のための費用もかからない。また、パソコン以外にタブレット・スマートフォンなどからも数回クリックするだけでカラーのジャーナルが閲覧できるため、利便性の高いポートフォリオと言える。以下図 8 は本交流プログラムで参加者に配布した電子ジャーナル集である。



図8 電子ジャーナル集

4. 考察

ここでは、プログラム実施中の参加学生の様子の観察及び自由記述式の事後アンケートを基に「異文化理解」「外国語学習」「Flat Stanley Project」「国際交流」という4つの観点から今回のプログラムの成果について考察する。

まず、「異文化理解」についてであるが、事後アンケートに、例えば「韓国の学生に韓国の文化や、今韓国ではやっているものをたくさん聞くことができた。(日本09)」「韓国の暮らしや食べ物を深く知ることができて本当にホームステイしているみたいと感じた。(日本04)」という記述が見られ、バーチャルでありながらもリアリティをもって異文化に接することができたことの満足感が読み取れた。また「ドラマや映画で見る韓国ではなく、リアルな韓国の大学生の生活を知ることができたのがとてもよかったです。例えば、韓国のファッションというと、ミニスカートだったり、スキニージーンズのようなピチっとした服のイメージがあったのですが、実際はロングスカートやワイドパンツなどが流行りのようで日本の学生とあまり変わらない服装であることを知れました。(日本05)」という記述からは、参加者が普段メディア等を通して得ていた文化知識と今回の交流で得た文化知識の比較を行い、自分なりに異文化知識の構築を試みていたことが推察される。更に、相互にホームステイをするというプログラムの特性上、「滞在日誌を作成する上で、自分の住んでいるところの街並みや、食事を撮影することで改めて日本文化を知ることが

できました。(日本 10)」という回答のように、異文化のみならず自国文化についても多くの気づきが得られる可能性が示唆された。

次に、「外国語学習」については、事後アンケートの回答から交流相手の高い外国語能力に刺激を受けていたことが観察された。例えば「緊張のせいもあってうまく英語で話すことができなかった。韓国側の方は日本語がとてうまく話せているのに私が英語で返しても文法が成り立っていない、発音が悪いと聞き取れないということが多々あった。もっとネイティブに近いような発音を少しずつ学んでいきたい。(日本 07)」というように、交流相手の日本語能力と自身の英語能力を照らし合わせることで、自身の英語能力の課題を見つけ出し今後の目標を設定していた。このように、交流相手が外国語学習におけるロールモデルとなるという点は、学習者同士の交流ならではの特徴であると考えられる。また、「二人の中で日本語、韓国語、英語の三カ国が使われるのでもしわからないことがあれば他の言語で説明すればよかったので、スムーズにいったと思う。(日本 08)」という記述からわかるように 多言語・複言語使用が参加者の心理にプラスに作用し、緊張を和らげる効果があったことも観察された。今回日本語を学ぶ韓国の大学生に交流を依頼したのは、英語学習者から聞かれるネイティブスピーカーに対する緊張感をできるだけ小さくするためであったが、英語学習者が非ネイティブスピーカーと英語で交流する際に感じる第二言語話者同士の安心感や話しやすさに関する現象(東本, 2015, 2016)が今回も見られ、その点も本プログラムの実践において学生同士の活発で深い交流が実現した要因の一つの特徴として挙げられると言えるだろう。また、英語と日本語を学習対象言語として双方共に努力をして話すという共通の経験が達成感の共有にもつながったと考えられる。

続いて、今回導入した Flat Stanley Project の効果についても考察を試みる。事後アンケートには「ペアの人がどこに行くかや、プランを考えることがとても楽しく感じた。もし、ペアの人と東京を回るならここが良いだろうなあなどと想像してみるのも面白かった。写真の中にスタンレーを入れることで親近感が湧いてよかった。(日本 07)」、「相手のことをイメージしてスタンレーの色を塗るのが楽しかった。(日本 06)」というように Stanley 人形に関する記述が複数見られた。学生の分身となる Stanley 人形を用いた交流活動形式を採用したことにより、交流相手に親近感を抱き、実際のホームステイながらに相手を迎え入れ、もてなすということが実現した。韓国側の参加者の中には、実際に空港まで行き、到着ロビーで Stanley 人形と写真を撮ることで交流相手を迎え入れ、バーチャル・ホームステイを開始した参加者もいた。Stanley 人形が無ければ、インターネットで検索した空港の画像を貼り付けて済ませてしまいそうなものであるが、Stanley 人形があったからこそこのような行動が引き起こされたと考えられる。更に、参与観察を通して、学生が人形の存在と外国語を使用する自己像 L2 Self を通し、より自身の意見や希望を伝えやすくなるという、Ideal L2 Self (理想の第二言語自己像) とアヴァターの存在に由来する自己表現のし易さと自己効力感の向上 (Tomoto, 2021) の現象も観察された。特に交流相

手に対しホームステイ滞在中の Stanley 人形の活動希望を伝える場面において、自分を主語にして要望を伝えることには遠慮を感じるが、Stanley 人形を主語にしたことにより希望を存分に伝えられたという満足感と、Stanley 人形を主語にすることによるアサーティブな自己主張表現が叶い、理想の L2 Self へ近付けたという声も学生から聞かれた。このように、一見子ども向けのように見える Stanley 人形という一枚の紙人形が、今回のプログラムにおいて大きな役割を果たしていたことがわかる。現在、話題を集めつつあり、近い将来、注目を浴びるだろうと予想されるメタバース⁴上の教育の場においては、自分のアバターを通して、様々な活動、コミュニケーション、学習等が可能になるが、本交流プログラムの実践は、そこでのアバターを通じたコミュニケーションに通じるものであり、メタバース上での学習とコミュニケーションの効果を垣間見ることができ、新しい時代の取り組みに通じる要素を内包していることがわかる。しかも、実際のメタバース上での学習とコミュニケーションの為には、有償、有料の機材やサービス等、経済的にも技術的にも負担がかかることが予想されるが、本交流プログラムは、参加者が紙やペン、スマートフォンなど普段使っているものを用いて経済的かつ技術的な負担をさほど感じることなく一連の活動が行えるという教育的にも手軽さを有している利点があげられる。

最後に、リアルタイム及びバーチャルの「国際交流」という観点からの考察を試みる。まずは何より交流相手の反応を即時に得られるというのが利点として挙げられる。「ブレイクアウトルームを使って1対1だったので話しやすく、より仲も深まった感じがした。(日本06)」、「日誌を紹介している時に相手の子がすごく嬉しそうにしているのを見て嬉しかった。(日本04)」という事後アンケートの回答のように、短い時間でも相手と距離が縮まっていることが実感できる点や、自身の成果物であるジャーナルに対して相手から評価を得られる点が活動に対する満足感を一層高めていると考えられる。また、英語学習者の場合、英語圏の人との交流を志向することが多く、なかなか英語圏以外の国に目が行かないが、「国と国の距離が近かったり、日本との時差がなかったり日本と近いにもかかわらず、普段交流を持たないので非常にいい機会です楽しく交流することができました。また、年齢の近い方々との交流で私たち日本の学生との違いを共有できとても興味深いと思いました。(日本03)」という回答のように、様々な異文化に気軽に触れられることでより視野が広げられるのも大きな利点であろう。そして、今回はコロナ禍で海外渡航が制限され、文化交流の機会が急減してしまったことからこのプログラムが始まったわけであるが、今後のウィズ/ポストコロナ時代においても、バーチャル交流の様々な利点は失わ

⁴ メタバース（仮想空間）とは、オンライン上に構築された3DCGの仮想空間のことであり、アバターをつかってその空間に入り込むことで、他のユーザーとのコミュニケーションを楽しんだり、メタバース内のコンテンツで遊んだりすることができ、仮想空間の中で現実に近い自由な交流や活動などができるとされる。IT企業「Facebook」のCEOであるマーク・ザッカーバーグ氏はメタバースの開発へ多額の資金をかけていくことを公言していたが、メタバースに関するリブランドに向けて、2021年10月28日に社名を「Meta（メタ）」に変更した。

れないと考える。「世界中の人とやってみたいです。留学へ行った人の体験談を聞くよりも自分の知りたいことややってみたいことを知れるし、留学に行く勇気がない人も挑戦しやすいと思いました。(日本05)」という回答からもわかるように、バーチャルでも本人が経験するということは他人から伝え聞くこと以上に大きな価値があり、本交流プログラムの様なオンラインでの交流経験は留学等の次の一歩へ踏み出すための原動力となり得ると考えられる。

5. おわりに まとめと今後の課題

以上のように、プログラム実施中の参加学生の様子を観察と自由記述式の事後アンケートの内容に関して、抽出した「異文化理解」「外国語学習」「Flat Stanley Project」「国際交流」という4つの観点において成果があったことを考察した。

「異文化理解」の観点では、バーチャルでありながらもリアリティをもって異文化に接することができた満足感や、参加者が普段メディア等を通して得ていた文化知識と本交流プログラムで得た文化知識の比較を行い、自分なりに異文化知識の構築を試みていたことが推察できた。また、異文化のみならず自国文化についても多くの気づきが得られる可能性が示唆された。

「外国語学習」の観点では、交流相手の学習中の外国語能力と自身の学習中の外国語能力を照らし合わせることで、自身の今後の課題を見つけ出し目標を設定していたように、交流相手が外国語学習におけるロールモデルとなるという学習者同士の交流ならではの特徴が把握でき、多言語・複言語使用が参加者の心理にプラスに作用し、緊張を和らげる効果があったことも観察できた。更に、英語学習者が非ネイティブスピーカーと英語で交流する際に感じる第二言語話者同士の安心感や話しやすさに関する現象が見られ、その点も本交流プログラムにおいて学生同士の活発で深い交流が実現した要因の一つの特徴として挙げられ、また、英語と日本語を学習対象言語として双方共に努力をして話すという共通の経験が達成感の共有にもつながっていることがわかった。

「Flat Stanley Project」の観点からは、学生の分身となる Stanley 人形を用いた交流活動形式を採用したことにより、交流相手に親近感を抱き、実際のホームステイさながらに相手を迎え入れ、もてなすということが実現できた。また、自分を主語にして要望を伝えることには遠慮を感じるが、Stanley 人形を主語にしたことにより希望を存分に伝えられたという満足感と、Stanley 人形を主語にすることによるアサーティブな自己主張表現が叶い、理想の L2 Self へ近付けることも把握できた。

「国際交流」の観点からは、短い時間でも相手と距離が縮まっていることが実感できる点や、自身の成果物であるジャーナルに対して相手から評価を得られる点が活動に対する満足感を一層高めていること、様々な異文化に気軽に触れられることでより視野が広げら

れること、バーチャルでも本人が経験するということは他人から伝え聞くこと以上に大きな価値があり、留学等の次の一歩へ踏み出すための原動力となり得ることが分析できた。また、本交流プログラムにおける教員の参与型観察において、異文化感受性発達モデル(Bennett,1986)の段階がより進んだように見受けられる学生もいた。

以上のような多数の成果が本交流プログラムの実践により得られたが、今回の交流をもとに、今後の外国語教育の現場において単に机上の語学学習にとどまらず多文化の学習と多様性の理解へと繋がる視座と展開を意識して指導と研究を継続したい。

今後、フォローアップ学習とより深い交流や協働プロジェクトを継続し、COIL 実践前後の学生の異文化感受性発達の様子や異文化対応能力を測ると共に、ソーシャルネットワーキングアプローチ (SNA) の側面からの言語教育と異文化理解教育の可能性も探り、オンライン協働学習実践法の改良に努めたい。COIL 型異文化協働学習の可能性や効果は非常に大きく、コロナ収束後も学生の貴重な海外との接点として継続すると共に、海外研修再開後の渡航前事前授業などへも活用できるよう発展させることを今後の課題としたい。

謝辞

本研究は、横浜商科大学の研究助成を得て行いました。ここに感謝の意を表します。また本研究の交流相手校マッチングの機会を頂いた「国際交流基金ソウル日本文化センター」及び「SNA 交流学習実践研究会 (SNA-COIL)」にも感謝の意を表す次第です。

参考文献

- 池田佳子 (2015) 「アウトバウンド促進授業実践としての COIL (オンライン国際連携学習)」『グローバル人材育成教育研究』第 2 巻, 第 2 号, pp.65-70
- 池田佳子 (2020) 「ICT を活用し海外の学生と行う国際連携型の協働学習『COIL』の教育効果と課題」『JUICE Journal, 2020 年度 No.2』 pp.20-25
- ウィルソン・エイミー, 岩野雅子 (2021) 「国際文化学科の人材に求められる行動特性の観察: BEVI-J と COIL の試行を通して」『山口県立大学学術情報』第 14 号, pp.67-78
- 岡崎威生, 石川隆士, 名護麻美 (2021) 「COIL 型教育を活用した太平洋島嶼地域の持続的発展に資するグローバルリーダーの育成」『琉球大学教育センター報』 pp.102-110
- 検校裕朗 (2017) 「『外国語学習のめやす』と実践報告」『韓国日本学会 2017 年度第 95 回国際学術大会 Proceedings』 pp.149-152
- 検校裕朗 (2018) 「日韓交流学習実践報告」『韓国日語教育学会 2018 年度第 34 回 国際学術大会論文集』 pp.64-66
- 検校裕朗 (2021) 「韓国における SNA 交流学習実践研究会の創立と実践の意義」『韓国日語教育学会 2021 年度第 39 回国際学術大会論文集』 pp.29-32
- 小林葉子 (2010) 「コミュニケーション教育と英語コミュニケーション教育」『岩手大学人文社会科学部紀要』第 86 号, pp.95-105

- 佐藤響子, Carl McGary, 加藤千博 (2019) 「大学英語教育の質的変換『学ぶ』場から『使う』場へ」
春風社
- 全炳徳, Miyamoto Yuki (2019) 「日米大学間の COIL (GLE) 型授業の実践と課題」『長崎大学教育
学部教育実践研究紀要』18, pp.251-260
- 田中武夫, 田中知聡 (2003) 『『自己表現活動』を取り入れた英語授業』大修館書店
- 當作靖彦 (2013) 『NIPPON 3.0 の処方箋』講談社
- 當作靖彦 (2021) 「新時代の言語教育アプローチ—SNA (ソーシャルネットワークングアプローチ)—」
『韓国日語教育学会 2021 年度第 39 回国際学術大会論文集』pp.25-28
- 當作靖彦, 中野佳代子 (2012) 『外国語学習のめやす 2012』国際文化フォーラム
- 東本裕子 (2015) 「使用言語による思考・表現方法の変容に関する一考察」『比較文化研究』No.118,
pp.139-154
- 東本裕子 (2016) 「外国語習得における背景文化の作用について」『比較文化研究』No.123, pp.125-
136
- 中津川雅宜, 平田祐基 (2017) 「ブレンディッド・ラーニングによる英語学習意欲について—ビデオ
プロジェクトを通して—」『小樽商科大学言語センター広報 Language Studies』第 25 号,
pp.33-40
- 菱川邦俊 (2021) 「日露間における COIL 型授業の実践—京都外国語大学・モスクワ市立大学『日露
共同授業』を例に—」『ユーラシアへのまなざし』pp.49-58
- 藤山一郎 (2021) 「日本・インドネシア間における COIL 型授業の実践と課題」『和歌山大学クロス
カル教育機構研究紀要』第 2 巻, pp.108-118
- 三浦孝, 中嶋洋一, 池岡慎 (2006) 『ヒューマンな英語授業がしたい!』研究社
- 山下美樹 (2021) 「オンライン国際連携学習 (COIL) の実践と考察: 海外パートナー校の大学院生
による学習支援」『麗澤大学紀要』第 104 巻, pp.105-111
- 山本志都 (2002) 「異文化感受性発達尺度 (The Intercultural Development Inventory) の日本人
に対する適用性の検討: 日本語版作成を視野に入れて」『青森公立大学紀要』pp.24-42
- Bennett M.J. (1986) A Developmental approach to training for intercultural sensitivity.
International Journal of Intercultural Relations, 10, pp.170-198.
- Byram Michael (2013) Foreign Language Teaching and Intercultural Citizenship. Iranian Journal
of Language Teaching Research, Vol1, No.3, pp.53-62
- Tomoto Yuko (2021) Learners' Self-Esteem Improvement by Constructing Ideal L2 Self-images
in Language Learning. International Journal of Advanced Research in Education and
Society, Vol3, No.2, pp.38-49

